

熱戦を見守って二十余年。 クスノキと球場のドラマ。

日本一広い球場として知られる藤崎台球場ですが、私は「緑の球場」としてもPRしたいですね。ネット裏から見ると外野の外にある七本のクスの大木が球場を囲むように茂っています。プロ野球の選手たちも、バックにある緑のおかげで、ピッチャーが投げる球がよく見えると絶賛してくれそうです。

球場は、昭和三十五年、国体のとき完成しましたが、私は翌年からずっとここに勤務していますので、もう二十年以上、毎日のようにクスノキを見ていることになりました。

四月から五月にかけては、クスノキの若葉が一際きれいで、日々、色濃くなっています。そんな葉の色の変化に野球シーズンの到来を感じますし、外野席のクスノキの木陰に観客が集まる姿にシーズン最盛期を感じるという具合で、クスノキは球場ドラマの背景になりきっています。このクスノキには、いろいろな思い出があります。中でも、四十八年、ナイター用の



熊本県審判協会審判委員長 上田 正明

照明灯が設置されたときのことです。現在照明灯は、高さ三十七メートルあるのですが、設置の際には、クスノキより高くしては美観が損われるという意見と、照明の機能を果たすには高くするべきだという意見が対

立しまして、だいぶもめました。結局は機能を重視して、クスノキより高いものを作ったわけです。工事のときも、六基のうち二基がクスノキのすぐ横に立つたため、作業時は、まるで腫れ物に触るような騒ぎでしたよ。枝でも折ったら、それこそ県民が許しませんからね。近頃の高校生は、金属バットを使うので、この広い球場でもスタンドに打ち込む子が増えました。が、印象的なホームランといえば、やはり、三十七年、巨人の長島選手が打った弾丸ライナーの場外ホームランですね。最近では、西武で活躍している秋山選手が、八代高時代、夏の大会決勝戦で打ったホームラン。とにかく振りかざったのを覚えています。

しかし、未だクスノキを直撃するようなホームランは見ることがありません。将来、そんな選手が熊本で育って欲しいですね。もともと文化財の保護の面では問題になりそうですが……。



藤崎台のクスノキ群

熊本のシンボル熊本城は、県木のクスノキで覆われている。なかでも、城の西端にある藤崎台県営野球場には、七本の大きなクスノキが群生している。これ程の巨木が、一か所に群生しているのは全国的にも珍しく、大正十三年に国の天然記念物に指定された。

ここを藤崎台というのは、明治十年（一八七七）の西南戦争で焼失するまで、藤崎八幡宮（後奈良天皇の勅額に八幡とあったので、藤崎八幡宮という）があったからである。

藤崎八幡宮の神木であったクスノキ群は、樹齢七百年から八百年と推定され、最も大きいものは、幹回り十二メートル、高さ二十八メートルにも達している。夏になると、外野席で観戦する野球ファンに格好の木陰を提供してくれる。

心のふるさと民話とわたし

フレンモロ

●感想文
松橋町立松橋小学校
5年
田中 まさ子さん



●感想文
5年
村山 知子さん



5年
和田 康志さん



私は、はじめ、フレンモロって、何だろうかなあと思いました。ドキドキしながら、読んでみると、「なあんだ」と思いました。そして、クスノキわらってしまいました。だって、それは、古くなったわらやねの雨もりの事だったのです。

この、お話のおもしろい所は、ぬす人と、おおかみの、あわてんぼうな所です。フレンモロが、もつともつとすごい、かい物だと、かんちがいして、おそろしくなつてにげだしてしまうという所は、本当に、あわてんぼうだなあと思いました。

どうして、おじいさんと、おばあさんは、わらやねの雨もりが、こわいのかなあー。私は、おおかみや、ぬすびの方がこわいのに。ちよつとだけ、おおかみと、ぬす人がかわいそうになりました。

このお話を読んで、私たちがいつも使っている言ばも、文章にすると、とってもおもしろいなあと思いました。私の住んでいる、松橋町にも、こんな、おもしろい、民話があるとは知りませんでした。もつともつと、たくさんよんでみたいと思いました。



「フレンモロ」(古家の洩り)

あらまし
下益城郡松橋町に岡岳という可愛い山がある。

昔、この山の麓に、古か藁屋根の家があつて、耳の遠か爺さんと婆さんが住んでいた。雨の降るたびに、雨もりのする家で、その雨の夜もポタリ、ポタリと雨もりが始まつていた。

二人は、相手に聞こゆるぐらい太か声であつて、耳の遠か爺さんと婆さんが住んでいた。雨の降るたびに、雨もりのする家で、その雨の夜もポタリ、ポタリと雨もりが始まつていた。



で、この世の中で一番恐かもんは何だろうかと話しあつていた。爺さんは、「盗人が一番恐ろしかな。何でもかんでん持つていくし、時には命までもおつとるけん。」これを聞いて、さつきから台所の隅に隠れていた盗人は、胸をたいて得意になつた。すると、「そらあ盗人も恐ろしかばつてん、人間ばかりころす狼の方がよっぽど恐ろしか。今夜当り来ちやおみやか。」と婆さんは、台所の窓を気にしながら言つた。

丁度その時、その窓の下には狼が来て耳をすましていたが、この話を聞いて慌にいった。ところが話が進むにつれて、もつと恐ろしか、得休のしれん怪物のおるごだる。「一番恐ろしかつは、やつぱフレンモロだらうなあ。」「ほんなこつ、そういへばフレンモロは防ぎ様もなか。今夜あたりそろく来るごたる。」

これを聞いた盗人も狼も、恐ろしさにかけてもたつてもおられず、ワッーと逃げ出した。しかし、あんまりあわてたので盗人は、狼の背に乗つてしまつた。狼はこれをきつとフレンモロが乗つたと思ひ、又、盗人は、フレンモロに乗つてしまつたと早合点。遂に狼が盗人を井戸に振り落したまては良かったが、井戸の底から盗人のうなり声。狼はもう矢も盾もたまたらず、山の中へすつとんでいった。盗人も、痛い目に会われ、こぎやん恐ろしか所じや稼がれんと足をひきすりながら去つていった。実はこのフレンモロ、何のことはない古くなった藁屋根の雨洩りのことだつたそう。